
俺の弟がこんなに鬼畜だなんて.....

雨舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の弟がこんなに鬼畜だなんて……

【Nコード】

N2833V

【作者名】

雨舞

【あらすじ】

ある日の深夜、突然高野歩は弟、桐耶から相談と称してのカミングアウトをされた。

その内容は、彼が腐男子、つまりBLをこよなく愛し男が2人いればそちらに考えてしまう趣味を持っている男だと言われたのである。突然のことに驚き戸惑うが、自他共に認めるブラコンの歩は桐耶の口上に騙され、彼の奴隷になってしまう。

それによって、歩の友人などを巻き込んで繰り広げられていく学園モノ、なはず……

「兄さん……ちょっと俺、相談したいことがあるんだけど、いい？」

深夜、俺の部屋を訪ねた弟がそう言ったのはいつだっただろう。
そう、それはホンの2週間前のことだった。

「はあー。やっと終わったぜ……オワッ!!」

「これで歩と遊べるな。期末期末うるさかったからお前」

「は、離せよ、おい。ウツ……息が詰まる!!ホントにマジヤバイから今の状況!」

俺^{たかのあゆむ}「高野歩」は悲しいかな、デカイ体にも関わらず、俺より頭一つ分小さい友人A「荒坂浩介」^{あらかこうすけ}に抱きつかれ勢い余って首を絞められる形になり涙目になっていた。

殺されてはたまらない　いやいや、しないでしょ（笑、と思う人もいるかもしれないが、コイツはするぞ　と懇願すると、洪々な

がらも離してくれた。

し、渋々だと??お前、俺を本気で殺すつもりだったのか!?
心の中で叫ぶが伝わるはずがない。

この時、浩介は『あのまま、俺があゆむを殺してたら俺だけのモノ
になってたのになぁ』と、下唇を噛みながら恐ろしいことに本気で悔しがっていた。

恐ろしい奴だぜ、まったく……

そう思いながら、はや10余年。小学校のとき いや幼稚園のときだったか? 浩介に懷かれて以来、ずっと一緒にいる。もはや、腐れ縁としか言いようがない。それを言うたび、浩介は『赤い糸だよ』と意味不明なことを言うが。

「なあなあ。いつ遊ぶ?俺、26日から合宿があるんだけど……」

早速、浩介は遊ぶ日程を決めに入ってきた。

26日から……

確か俺は27日から3日まで合宿があるな。今日は27、今日から春休みだ。合宿あけてからの方が良さそうだな……

「浩介、何日まで合宿?確か7日から学校だよな」

「うーん?多分3日まで。じゃあさ、5日に遊ぼうよ!!ね?」

5日……予定を洗っていくと、多分何も入って、ない。

「おk。じゃあ4月の5日金曜日で。」

確かめるように浩介の方を向くと、ニカツと笑い「歩の家に行くかな!」と元気イッパイに答えてくれた。

今日クラスであつた事や面白かつたこと等、世間話をしていたらあつという間に別れるところが来た。

ここを左に曲がれば、俺の家。まっすぐ行けば、浩介の家だ。

それじゃあ、と手を振り左へ行こうとすると、浩介が後ろから言うてきた。

「あ、合宿の前にお前んち行くから！突然訪問するけどよろしく頼むぞ〜っじゃあな」

それだけを言い、まっすぐ走り去って行つた。

おいおい……俺はいつも家にいなくちゃいけないって事か？

嘆息はしたものの、いつもの事なのでそのまま帰路に着いた。

「ただいま……」

歩の体には少し狭い玄関で一応シーンと静まりかえり人がいるかも分らない家に向かつて声をかけた。

……………。

誰もいない……のか？

いや、しかし。俺が愛して止まない弟がいるはずだ。

やはり歩が通るには少し狭い廊下を通り歩の部屋に向かう。

こんな時間まで　　といつても、まだ6時だが　　歩が家にいないことはまずない。

ドスドスと階段を駆け上り、俺の部屋よりも奥にある弟　　高野桐^{たかのと}耶^{うや}　の部屋のドアを乱暴に開けた。

桐耶は彼が自費で買ったというハイスペックのPCの前に座り、へ

ツドフォンをかけなにやらしていた。

こちらからは、桐耶の背中しか見えないが。

おーいいにおい……癒されるなあー桐耶ツて感じ。ここなら何時間いてもいい。

「桐耶？なにしてるんだ？」

……。

答えてくれたっていいじゃないか……

っていうか、本当に桐耶は後姿もカッコいいなあー

見て！あのうなじ……白い肌にかかる産毛。一度も染めた事のない漆黒のつやのある髪。制服の上からも分かる鍛えられた筋肉。引き締まった臀部。

そんな事を彼の体を眺めながら考えてたら、いきなり桐耶が振り向いた。

オワッ……！！

ぎょっとして、持っていた学校していのカバンを思わず抱きしめてしまった。

……。

えっ、ちよつと何か言ってくれないんですか……

俺の姿を凝視される。

ウン？俺なんかした？しましたか？桐耶くん。何もしてないはず……あ、この前桐耶くんが買ってきたプリン、こっそり食べちゃった

よ……それかなあ？

「兄さん、プリンじゃないから……勝手に俺で変な妄想しないでくださいね」

え、何で分かったんだ？え、エスパー？？

「エスパーでもないから……あと、俺の部屋に勝手に入らない。」
スタスタと歩きながら言ってきて、俺は追い出されるように部屋の

外に締め出されてた。

締め出される瞬間さっきまで桐耶がつついていていたPCが目に入ったが、もう閉じられていて何をしていたか分からなかった。

クソ、開いておいてくれたっていいじゃないか。お兄ちゃんにぐらいサービスしろ……

「桐耶、今度からタダイマって言ったらちゃんと返事くらいしろよな」

悔し紛れにそういうと、再びドアが開いた。

「オカエリ^^」

ニコつと笑った顔に『黙れ』と書いてあるのが見えた。

ハッ。もしかして女の子のエロイ動画とか見てたのか？俺が途中で中断しちゃった？

ウワ……何てことしたんだ。

男同士ならではの連帯感がここで勝手に発揮された。

可愛いなあーウチの弟は……

歩には、途中で中断されイラついているように見えたのである。知らぬ間に同情されている桐耶だった。

真実は近いようでまったく違っていたが。

その真実のカミングアウトを相談と称して今夜されるとは知る由もなかった。

2（前書き）

実際の団体・企業・人名・商品にはなんら関係ありません
W
フィクションです。

「はあゝ……やっぱり駄目だ。」

溜息と共に背中からベットのの上に落ちた。バンザイという形になった手に持たれているのは、昨今の中学生・高校生は大体持っているであろうゲーム機器、ピーエスピーPSPだ。

すでに時刻は深夜1時。

歩はもう4・5時間はぶつ通しでゲームをしていた。内容は、恋愛シュミレーションゲーム『ホニャララ×××』。浩介に貸してもらっていた物だった。

何でも、元は浩介の姉の持ち物らしい。それを姉に勧められやってみたら面白かったので俺にも、という事になったらしい。すでに姉から貰いつけ完全に浩介の持ち物との事。

貸してもらったは良いが、このゲームは浩介が借りる際に言っていたのをそのまま言つと『BLゲーム』というモノだった。

つまり、男同士の恋愛シュミレーションゲームだったのである。そんなものがあるなんて、と聞かされた瞬間は単純にビックリしてしまった。

何事も経験！と、その後借りる旨を伝えたら、浩介は顔がだらしくなくなっていたな……

いつもはカッコいいんだが、正直キモかったな。あの顔は……

やってみたさ！やってみた。

恋愛シュミレーションゲームだから簡単なのかと思いきや、ところがドッコイ！難しい……

バットエンドに進んでしまい、なかなかハッピーなエンディングまで行かないのである。

もう、仲間が哀しむ所なんて見たくないんだよ！！幸せでいてクレよな。

ゲームにまで真剣にやってしまうのは歩の欠点、とも言えるだろう。そんなところに惹かれる人も多いのだが……

俺は男性向け女性向け問わず、一回も恋愛シュミレーションゲームなる物をやったことがなかった。予想外にソレは精神的ダメージがあるモノだったのだ。

その上、俺はゲームなんて大の苦手……恋愛なんてリアルでもしたことがない。告白したこともないし、告白されたこともない。

そんな俺が恋愛シュミレーションゲームなんて出来るのだろうか。諦めてしまえばそれで終わりだが、彼（主人公）をなんとかしてでも幸せにしたかった。

「よし、も一回やるか。これで終わりにしよう……」

（1時間後）

「むひゃ……無理だろ、こんなの。もう止め止め」

PSPをボトッとベッドの上に落とした。両足立膝で肢と肢の間に手をダランとたらし壁にしなだれかかるように背を預ける。

あまりの自分の不甲斐無さにため息が出てくる。

「兄さん、入っていいですか？」

「おおよ」

思考能力が低下していた歩は、こんな深夜に何事だ、とも思わず生返事で答えた。

入ってきたの『兄さん』と俺を呼んでいた事から分かると思うが、弟の桐耶だ。

「深夜遅くにすいません。まだ明かりがついてたので……実は兄さんに相談したいことがあるんです。」

「え？お前が、俺に？いや、嬉しいけどさ。」

「こんな時間にしか相談できなくて……」

頭もよくて何でも出来る愛しいわが弟が俺なんかに相談したいことがあるなんて信じられなかった。嬉しさと驚きが頭の中に雑居していた。

しかも、よくよく考えれば言っていた様に今は夜もよく深けた深夜なのだ。そんな時間に相談しなければいけない事とは何なのだろうか？

さつきまでは驚きで桐耶の表情など注意して見ていなかったが、よく見ると彼の顔には笑みが浮かんでいた。少女マンガなら背景に花が咲くだろうと言っほどの笑みが。

自身が相談をしに来ているのにその笑みは何なのだ。

しかし、いくら考えてもエスパーでもないのに答えが出るわけがない。

「で、相談って？俺に出来ることなら何でもするよ」

「何でも、してくれるんですか？本当に？」

先にも書いたとおり、歩は思考力が著しく低下していた。だから、桐耶の危険な笑みに気づけるはずもなかった。

歩の言葉を再びなぞり確認してくる桐耶に何の警戒心も不思議も抱かず、「本当だよ。桐耶のためなら何でもしてやる」と返事をしてしまったのだった。

その言葉で、彼の高校生活を一変してしまうことも知らずに。

高校生活だけでなく、人生すら変えてしまったのかもしれない。

2 (後書き)

遅くなつてすみません

3 (前書き)

お待たせいたしました^^
リアルにて忙しかったです……

「兄さんに……いや兄さんは僕の理想のウケキャラなんです!!!」
「!」

つたに違いない！
そ、そうだ。
そうに決まってる。

ピンポン！！！ピンポン、ピンポン！！！！

「あ、はい！！」

そうだな。

実の弟を疑っちゃあ人間として終わってるよな。
愛しい弟が頼みごとしてるんだ。協力してあげなきゃ駄目だよな…
…兄としては。

「あ、浩介。お菓子あるよ。いる？」

中に入るように促しながら、聞く。

「ヤッホー お菓子？いるいるう！！！！ソレより、ゲーム進んだ？」
すると、すぐに明るい声が聞こえてきて、さっきまで沈んでいた気持ちはいったん浮上したが、小声で浩介が聞いた問いで元に戻って

しまった。

ゲーム、そうだ。ゲームもあつたんだ。
あれだけは絶対ハッピーエンドにいきたい。

「もしかして、歩にはまだ早かったか？」

浩介のつぶやきも脳内で攻略法を懸命に考えてる歩には聞こえていない。

「実はさ……バッドエンドにしか行かないんだ……ハッピーエンドにしたくて……手伝ってもらえないかな？」

「へ……？」

歩の部屋に付いた瞬間、あまりの衝撃で沈んでいると思っていた浩介は予想外の頼み事をされた。
予想外の出来事に頭がついていかなかった浩介は、思わず抜けた返事をしてしまったのだ。

「駄目か??? 今度、マックで何でも奢ってやるから!! その他にも、ひとつだけなら何でも言う事聞いてやる!!」

「ちょ……………」

「一生のお願い!!! この通り!!!!!!」

遂には、浩介は土下座までされてしまい現在上目遣いで可愛く見上げられてしまっている。

こんなところが理想のウケキャラだと桐耶がこの場にいたら鼻血を垂らし悶えながら叫んでいたことだろう。

所詮、腐男子とはいくら見目が良くてそんなものだ。

「いいよ……ちゃんと奢れよ。一つなら何でもいう事聞くんだったよな？ちゃんと守れよ」

そして、彼は鬼畜という言葉も知らなかったたのである
グットラック……

3（後書き）

浩介は爽やかイケメンであると同時に、鬼畜です!!!

4（前書き）

お待たせしました……

待つてゐる人がいるのか分らないですが、ただの自己満です!!

w
w

「ソラキタ

!!!!!!」

突然浩介が狂ったみたいに大声を上げ手を振り上げた。

流石に物事に鈍感な歩でも、「病院行くか？」とネ界の住人から見れば一瞬にして「日本語でok」と翻訳される言葉を思わず言ってしまった。

「いや、引くなよ!!!!俺は歩のためにやってんだぞ。つか、これ見てみ？」

いまだテンションが納まりきっていない浩介に若干近寄りがたかったが、言葉に促されゲーム画面を覗き込む。

「……………」

「ちゃんと見るよ!!!!やばくないか、これ!マジでネ申だよな!」

「……なに言ってた?どこがやばいんだよ、普通の朝の会話じゃないか」

すると、浩介は驚きの形相で歩を見てきた。

????マジで意味がわからない……

『おはようございます、偶然ですね。貴方は何時もこの時間なのですか?』

フ、フツウのヤンデレ敬語生徒会書記高氏杜尚じゃないか。
タカウジモリナオ

「どこが違うんだよ……」

「さては、お前!やりこんでないな???!!ゲーマーの風上にも置けない奴め!!」

「いや、だっから出来なかったから頼んだんじゃん」

「すまん……そうだったな」

スマン、て……いつものお前と全然違うぞ。

今日はなるたけ近づかないようにしようかな……

「説明しよう……会話のところで『おはようございます』と『偶然です』との区切りの間の句読点だ。ほら、みてみ。いつもは『。』で余裕があるが、今回は『、』だ。これが裏ルートに入ってたって証拠なんだよなあ……」

そんな事しみじみ言われても……っていうか、裏ルートなんてあったんだ。正規のやつでも駄目だったんだから分かるはずないよな

コンコンッ……

「どつぞー。今日は誰もいないはずなんだけど」

4 (後書き)

短いすね……
スンマソン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2833v/>

俺の弟がこんなに鬼畜だなんて.....

2011年11月17日21時10分発行